

## TA 研修会

北山奈津美\*・安井海洋\*\*

名古屋大学文学研究科 \*博士前期課程2年  
\*\*博士後期課程2年

梶原：どうもお待たせしました。ただ今から、本年度のTA研修会を開催させていただきたいと思います。去年はTA説明会ということでしたけれども、今年はTA研修会という名前になっております。私、本日の司会進行を務めさせていただきます、教育研究推進室の梶原と申します。よろしくお願いいたします。

このTA研修会ですけれども、この中でTAの経験が今までであるという方、どのぐらいいらっしゃるでしょうか。3分の1から半数ぐらいはいらっしゃる。残りの方がTAは初めてということになるかと思えます。

TA, Teaching Assistantの略ですけれども、文字通り、担当教員、先生のそばでいろいろな仕事をしながらその先生の教授法を学ぶというのが、TAの本来の目的でございます。ただ、特に理系と違まして、文学研究科、文学部は学問分野が非常に多岐にわたっておりますので、その先生の授業のやり方とかその講座の方針等々で、TAの使い方は全然違っている。実は私もほかの研究室のTAがどのように使われているかということ、あまり知らないという状況があるわけです。

ただその一方で、TAというのは、皆さんが履歴書にも書ける立派な、職歴ではないですけど資格になるわけですし、おそらく一般的なアルバイトよりもかなり高い給料をお支払いするということになると思えます。それにはそれなりの責任が伴うわけですし、そういったことを皆さんの中で情報共有をしていこうというのが、このTA研修会の主旨になります。ほかの研究室の中で、どのようなTAの使われ方をしているかという、いわゆるグッドプラクティスを皆さんで共有していくことで、少しでもTAというものを、履歴書に書ける資格として実質化していくことが目的となっております。

今回、2人のTAの先輩にここでお話いただいて、そのお話していただいたことをベースに、TAについてのフリートークのような形で会を進めていこうと思っております。1時間ぐらいですけれども、お付き合いいただきますようよろしくお願いいたします。

それでは早速ご報告いただきたいと思います。まずは美学美術史学の北山奈津美さんをお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

北山：初めまして。美学美術史学専攻の修士2年、北山と申します。初めに、授業で作成したパンフレット、同じ内容のものを2冊回しますので参考にご覧ください。

本日はTAの実践事例の一つということで、昨年私が担当しました、美術史実習のTA業務の経験についてお話することになりました。事例として、具体的な業務内容を話してほしいと伺っておりますので、昨年行った業務の内容と、その経験を通して得られたこと、感想などをお話ししたいと思います。

### 〈実習の概要〉

まずどういった授業だったか、ですが、私が担当した「美術史実習2」という授業は、通年の集中講義形式の授業でして、3泊4日で遠方の美術館、博物館、お寺などの見学を行う、専攻生向けの授業でした。内輪では実習旅行ですとか、研究室旅行とも呼んでいますが、例年は2泊3日のものを年2回実施していたのですが、予算等の都合で昨年から年1回の実施に変更になりました。



どういった内容で行ったか、ですが、昨年は10月21日～24日の日程で長野県内の各地、例えば軽井沢のセゾン現代美術館とか、長野市の善光寺、小布施の北斎館といった美術館、博物館、寺院など、合計12カ所を見学しました。TAは私以外に同学年の2人、全部で3名のTAが担当しました。参加者は教員4名と、私たちTAを含めた学生24名の合計28名です。

## 〈TA業務の内容〉

私たちが担当した業務は、行き先の決定から各方面への連絡まで、この実習全体を「コーディネート」することかなと思います。具体的には、事前準備として、まず3～4月にかけて教員の都合を調整して日程を決めます。それから、TA同士や教員と相談しながら行き先を決定します。それと並行しまして旅行会社に見積もりをお願いし、宿泊先、食事の場所、また移動手段となる貸し切りバスの手配をしてもらいました。この旅行会社への対応を私が主に担当しておりまして、各地の施設を見学して回るという形ですので、移動時間を考慮して最良の行程を組んでいただいたり、1日だけ、途中で夕食後に親睦会をするのが恒例ですので、そういったことに対応していただける宿泊施設をお願いしたりといったことを旅行会社の方と交渉しました。

次に、この実習には院生など見学だけを希望する学生も参加できますので、5～6月にかけて研究室の所属学生に連絡を回して出欠を確認しました。それと同時に、予定している訪問先の施設に団体見学の依頼をしました。TA3名で手分けをして、1人4件ほど電話や手紙で、展覧会の担当学芸員に解説をお願いしたり、寺院に特別拝観をお願いしたりといったことを行いました。特別拝観は何をするのかというと、例えば2日目の安楽寺さんでは、年に数回しか開かない、普段は閉まっている八角三重塔を特別に開けていただいて、説明をしていただきました。また、北斎館では館長さんに出てきていただいて直々にお話をさせていただき、飯田市美術博物館では担当の学芸員さんが予定を開けてくださって説明をしていただけまして、大変親切に対応をしていただきました。

この実習では、履修生には期末レポートのほかに、見学先への理解を深めるための事前レポートを課しております。訪問先が確定した時点で事前レポートの課題を教員と相談して決めまして、学生に課題を割り振って、夏休み明けにはレポート提出してもらうという

段取りをしました。集めたレポートは、先ほど見ていただきましたように冊子にしまして、旅行のしおりのような形で参加者全員の手元に渡るようにしています。

例年ですと実習当日のバスの中でレポート内容の発表会を行っていたのですが、移動中だと疲れてしまって集中できないということがこれまで考えられましたので、昨年、新たな試みとして、より集中できるように事前に教室を借りてレポート発表会を行いました。1人大体5分ほどで口頭発表をして、それに対して教員が解説やコメントをするという形で行いまして、発表者は16名おりましたので2日に分けて行いました。ちょうどこちらの教室と1階の大きな教室を借りて行ったのですが、事前発表会で全員発表できない場合も考えられましたので、初日の見学先の内容を当日バスの中で発表するということなら対応できるだろう、ということで発表順を工夫し、タイムキーパーを置いて時間が延びないように配慮をして行いました。ここまですべてが事前準備です。

この後、実習が始まりますと、実習中は訪問先の担当者の方へのあいさつやお礼、参加者の引率などを、TAが手伝う形で行いました。当日は先生方や参加している学生、また、先ほど学芸員さんに親切な対応をしていただいたというお話をしましたが、それ以外にも宿泊先の方々に、例えば親睦会の際の買い出しのために車を特別に出していただくなど助けていただいて、無事に全行程を終えることができました。

実習後は、訪問先へのお礼状を書いたり、費用の計算をして研究室費から助成金を請求したり、反省点を反映させてマニュアルをつくり直したりといった作業を行いました。

## 〈TA業務を終えて〉

こうした業務は、先輩方がこれまでつくってきたマニュアルがありまして、それに従いながら適宜改善を加えて行いました。今紹介しただけでも仕事量がとても多いので、教員への連絡と会計、学生への連絡、そして私が主に担当した旅行会社への対応といったように、TA同士で業務を分担して行っていました。そのため、報告・連絡・相談を心がけて協力しながら業務を遂行する経験ができたと思います。また、訪問先への見学や解説の依頼・お礼を、手紙や電話で行いましたので、私個人としてはこのような機会は普段あまりないので、基本的なマナーを実践するよい機会を得ら

れたと思っています。学部生のころは自分が履修生として参加していましたが、TAとしてそれを仕切る立場になり、初めてのこともかなり多かったのですが、なかなか貴重な経験ができたと思っています。

ただその一方で、期間も通年で長いということで、研究活動と並行して業務をこなすにはいささか負担になるところもあると思います。昨年の経験や工夫、ノウハウを伝えるという形で、今年TAを担当する後輩にも協力していきたいと思っています。

実は、私が実習の初日の集合時間に遅刻するというのをやらかしまして、本日このような形でお話ししてよいものかとも思ったのですが、何か参考になればと思います。以上です。(拍手あり)

**梶原**：北山さん、ありがとうございます。それでは、TAを実際使われた側ということで、美術史の松井先生にお越しいただいておりますので、一言、何かコメントをいただきたいと思います。よろしくお願います。

### 〈教員のコメント〉

**松井**：初めまして、松井裕美と申します。TAの皆さんの活躍についてごく簡単にコメント差し上げたいと思います。先ほど梶原先生から、TAというのは基本的に先生の教授法を学ぶという目的があるとおっしゃっていただきました。教授法を学ぶという意味では、北山さんがTAをつとめられた授業の場合には、TAの役割はかなりアクティブラーニングに近いものがあります。前年までのマニュアルがあるとはいえ、TAの方々一人一人が、いろんな問題に直面する中で臨機応変に行動しなければいけない場面が多々生じます。去年は北山さんをはじめとするTAの方に非常にきち



んと対応していただき、非常に頼もしく思いました。

さらに責任ということについても、最初に梶原先生にお話をいただきました。この点に関して、北山さんにもご説明頂いたように、タイムスケジュールの管理、それもTA自身だけでなく、全員が遅れないように工夫をするかたちでの管理に、責任感を持って取り組んでいただきました。具体的には、バスの中で到着の数分前に眠っている人たちを起こす、到着前に電話で美術館にアポイントメントの確認をするといった工夫です。美術館というと、美術史の学生たちが将来的に就職する可能性がある場所なので、そこでどういったイメージを持たれるかということは大変重要です。こういった面でも、学生としてだけではなく、社会人としても通用するような、素晴らしい働きをしていただいたように思います。

**梶原**：松井先生、ありがとうございます。それでは、北山さんのご報告に関しまして、また後ほど質疑応答の機会をもうけますけれども、事実確認等々で何か質問等がございましたらお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。

とりあえず、今のところよろしいですか。それでは、続きまして日本文化学の安井海洋さんにご報告いただきたいと思います。よろしくお願いたします。

**安井**：ご紹介にあずかりました、日本文化学の安井です。先程北山さんより実習授業に関するお話を頂きましたので、こちらは通常の、1回90分の講義のTAの経験からお話をしたいと思います。おおまかな構成としましては、基本的な業務内容と、担当の先生と話し合いながら工夫をしたこと、そして実際にTAという仕事を通して学んだことについて順番にお伝えします。

### 〈TA業務の内容〉

まず主な業務内容についてです。私が参加したのは飯田先生の「近代日本と文学」という講義で、半期の授業につき小説テキストを1～2作品ほど取り上げ、講読を進めてゆくという形式になっております。第一に、ごく基本的なことではありますが、受講生には毎回コメントシートを提出してもらう、その用紙の準備と回収はTAの仕事です。またコメントシートに加えて、毎回短いレポートを課題としていましたので、その回収も仕事の一環となります。それからプロジェクトを使用する場合のセッティングも行います。

第二に、TAの業務は授業中のグループディスカッションにも関連しています。この講義でははじめの約1時間を使って教員が話した後、残りの約30分を、その前の回の講義時に教員が出した議題に沿って、学生同士で話し合ってもらおうという構成を取っていました。議題の内容は、学生がテキストの指定された範囲を読む際の問いとして出されるもので、たとえば夏目漱石の『三四郎』を扱う場合、ヒロインの美禰子はどのような女であるかとか、ここに出てくる手紙は作品のなかでどのような機能を果たしているかなど、ごくシンプルでありながら読み手の発想を刺激する設問になっています。そして講義当日になると、学生がおよそ5〜6人程度のグループに分かれ、そのグループ内で議題について意見を交換します。

このあたりでTAの仕事が関わってきます。つまりTAは単に授業に参加するだけではなく、その授業を展開していくための、いわばサポートをするわけです。その点で言うと、私は毎回のグループディスカッションで司会のような立場を務めました。まず議論の冒頭にTAがこの箇所はこのように解釈できるという意見を出すことで、それをグループ内のたたき台にしましょう。すると、ほかの学生が出したコメントとの類似点や相違点が分かりやすくなり、各々の意見のマッピングが可能となるのです。あるいはTAから学生に質問することで、意見をより具体的にってもらうということも行っていました。そして議論の後には代表がグループ内の意見まとめ、受講生全体に向かって話すのですが、この段階までの補助がTAの業務内容となってくるのです。

そして第三に、この講義では毎学期末の数回を使って大学院生がテキストに関する個人発表を実施することになっているのですが、その際のレジュメの印刷と発表の司会をTAが担当します。これも先ほどのグループ内の議論と同じ要領で、発表者に対して主張をより鮮明にするための質問をしたり、聴取者の学部生に発言を促したりすることで、全体の交通整理をします。特に学部生に関しては、院生の発表となると気後れがするのかもしれないので、発言が滞りがちになるので、司会者が議論の潤滑剤となるよう努めたつもりです。

以上、この講義におけるTAの業務についてお話ししました。私個人は授業をうまく回転させてゆくことを目標としていましたが、それをどれほど実践できたかについてはなんとも申せません。

## 〈TA業務を終えて〉

次に反省点について述べたいと思います。

反省点としては、主に講義時間以外の業務についてです。まず受講生からの講義に関する質問に答えることもTAの仕事の一環なのですが、実際のところ意見や質問はあまり来ませんでした。初回の講義で「いつでも質問しに来てください」と言うだけでは、学生は話しかけづらいのかもしれない。このことについては今後対策を考えてゆくべきと思っています。

また文献調査の方法についても課題が残りました。この「近代日本と文学」に出席する以前に近代文学の演習に出たことのある学生なら、作品の先行研究の調べ方や、作品の背景に関する文献・論文の探し方を心得ているかもしれませんが、しかしそういう経験のない学生や、文学という一種の芸術表現の考察になじみのない専攻分野の学生は、いざ小説について論じる段となったときに戸惑うことがあるでしょう。特に小説というフィクションと実際の歴史的出来事とを結びつけて考えるには、歴史学とはいくらか異なる思考の枠組みが必要になる。そのコツを教えるための工夫をもっとするべきだったという反省があります。

これは任期を終えた後に考えたことですが、TAはただ学生の質問を待っているだけではなく、文献調査の方法をまとめた文章や近代文学研究の基礎文献のリストなどを作成し、初回に配布するのも良いかもしれません。無論、担当の教員と話し合いつつ作るのが理想的といえましょう。

最後に、TAの仕事を通して、自分の学んだことを申し上げたいと思います。昨年度のTAの説明会で、梶原先生から、単に授業のサポートをして終わるのではなく、TA自身がこの仕事を通して糧になること、何か得るものがあると良い、といった主旨のことをお



っしかったです。この一年間はその言葉を念頭に置いてきました。今回の場合ですと、先ほども申し上げたグループワークの司会の担当を通して、今後自分が教える側に立った場合、どのように話したら伝えたいことが伝わるのか、またどのような話題を提供すると集団のコミュニケーションがうまく展開するのか、そういったことを学ぶ契機としては、今回の仕事はとても役立ったと考えています。質問によって議論が活発になったり、学生自身が次回への課題を見つけたりする。もちろん良い質問というものはそのときの話の流れや受け手との相性によってその都度異なるもので、マニュアル化することは難しいのですが、それでも学生からの応答を得られたときはその感触を覚えておくようにしています。

飯田先生の講義では教員と学生の間にメッセージの往復があり、どちらか一方ではなく両方で内容を構築してゆくという理想的な環境が出来上がっていました。その先生の講義の一部に携われたことは、いつか私が教える立場に立ったときのための重要な経験になると考えております。そして教育の実践に応用し得るということは、私個人に限らず、TAを担当するあらゆる方に共通して言えることではないかと思えます。

ちょっと早いですけれども、この辺りで飯田先生にバトンタッチして、ご意見を伺えたらと思います。どうもありがとうございました。(拍手あり)

梶原：飯田先生、よろしく願いいたします。

## 〈教員のコメント〉

飯田：飯田です。今、安井さんが授業の内容をたいへん分かりやすく説明してくださったと思います。そもそも講義のTAですので、実習や演習のTAより、作業内容が少なめになると思うんですけれども、こうして報告できたのは、安井さんがいろんなことを自発的に学んでくれたからだと思います。

教員の授業方法を学ぶ機会となるということを、梶原先生がおっしゃってくださいましたが、それに安井さんが付け加えてくれたように、授業に加わっていくとか、授業をつくっていくのにTAの人に参加してもらうということは、とても大事だろうと思っています。私が今後、今の授業形態の中でさらにTAの人にしてもらえるといいかもしれないと思っていることがいくつかあります。例えば、前半の講義後のディス

カッションのための問いを今は私が出しているんですけども、それをTAの人に出してもらってもいいかもしれないと思っています。今は講義と問いを補完的に配して授業全体を構成していますが、もう少し授業に積極的に介入していただいて、私が気付かないような面白い論点というものを提示してもらうことができると思いますが、前半の私の話を相対化するようなこともできるかもしれない。全体として学びが深くなることあり得るんじゃないかと思うので、毎回じゃなくてもいいかもしれませんが、TAの人に問いを出してもらおうことをしてみたいと思っています。

それから私の授業では、ディスカッションのためのノートを毎回用意してきてもらっています。用意してくるとディスカッションがしやすいからです。その回収だけでなく、コメントをつけてもらうこともやってもいいかもしれないと思いました。特に課題ノートの中には、私がつくった問いに対する答えを構成してくる部分と、問いには当てはまらないことで気づいたことをまとめてもらう部分を設けているので、問いとは別に書かれた部分の応答をしてもらうのもいいかもしれないと思いました。いずれ皆さんが教員になったら、学生にコメントを返していく機会があると思いますけれども、その練習になるでしょうし、学生の視点を学ぶこともできると思います。

グループディスカッションの司会や、個人発表とディスカッションという形式の時の司会をしてもらいましたが、大学院のゼミとは違って、学部生が参加している講義の中での司会っていうのは、教育的な配慮が必要になると思います。学部生に教員が言っていることを伝えるにはどうしたらいいとか、学部生に問題意識を持ってもらうためにはどうしたらいいかというような、ちょっとした工夫をする機会にもなるんじゃないかと思ったりします。



というようなことで、講義における TA の役割についてはいろいろ私も模索中ですが、幾つか紹介させていただきました。以上です。

**梶原：**飯田先生、どうもありがとうございました。お二方にご報告をいただいたわけですが、大まかに分ければ前者は実習系の TA ということで、考古学も実習の授業に TA をつけていけば同様の流れになります。今回、皆さんにお渡ししている資料の中でも、私のものとか、あとは2015年の佐々木先生の授業は、どちらかといったらフィールド系の授業。佐々木先生の事例は、外に出てレンタカーを借りたり外の機関と折衝したりということで、今回北山さんにお話いただいた事例と似ているのでは、と思います。

それに対しまして、後者のように普通の講義演習系の授業に TA をつけることも当然あるわけで、そこらは大室先生の授業だったり、宮地先生の授業はそちらに近いと思いますので、併せてご参照いただけたらと思います。

ということでお二方にご報告をいただきました。特に TA をすでに経験されているという方が半数ぐらいいらっしゃると思いますけれども、ご自身の TA 経験に照らし合わせつつ、今回のご報告につきまして何か質問等ございましたら、ぜひこの場を盛り上げるためにもお願いしたいと思いますけれども、いかがでしょうか。

特に後半の安井さんのご報告、またその後の飯田先生のコメントでもありましたけれども、やはり講義・演習系、いずれのほうでも思うんですけれども、先生と TA が一緒に授業を組み立てていくいい事例だったと考えております。実際そのような授業を組み立てられていたと思います。

おそらく演習系の授業をご担当されている方が多いと思うんですけれども、自分のところはこういうことをやっているということがありましたら、どなたからでも結構ですので、ちょっと簡潔にお話いただくことは可能でしょうか。

**安井：**登壇者が口を挟んで申し訳ありません。本日は講義の話をしたので、演習の TA を担当されている方からのお話を今後の参考のために伺いたいと思います。現在、飯田ゼミで演習の TA をされている張文聰さんが一番後ろにいますので、急なことで申し訳ありませんが、ご意見を頂けないでしょうか。

**張：**皆さん、こんにちは。日本文化学講座、飯田ゼミ

TA の張文聰と申します。私は留学生で台湾から来ました。台湾大学でもう2年間ほど TA をやっていたけれども、TA の内容は主に外国語を教える授業の TA です。つまり、日本語を第二外国語として、台湾の学生に教える授業の TA をずっとやってきましたけれども、今年からは飯田ゼミの演習の授業の TA をやっています。今は3週間目になって、まだ何も経験がないと言っていいほどですが、やはり TA をやり始めて感じているのは、去年梶原先生がおっしゃっていた、コピーするとか教室の準備をやるだけではなく、もっと積極的に授業に関わってくるべきじゃないかということをおもっています。

現在自分は D2 ですが、ゼミに参加されている方は、M1 の方もいらっしゃるし、D3 以上の方や博士研究員の方もたくさんいらっしゃいますので、自分はとても TA という立場とは言えないんじゃないかという心細い感じがするのです。

ただ、先ほどの皆さんのご発表の中にもありますように、TA は単に簡単な仕事をやるのではなく、授業全体の展開に対しても何か助けられるんじゃないかと。例えば議論の展開の方向とか、あるいは質問者の意図がはっきりしていないときには、もっと意図が分かるような質問をするという仕事をできれば、いま頑張っています。できれば1年後、もし何かあったらまた皆さんと話したいと思います。以上です。よろしくお祈りします。

**梶原：**どうもありがとうございました。

今ご意見が出ましたように、学生の反応を見ながら授業を回していくというときに、どういうふうに学生の反応、受講生の反応を引き出していかっていくこと。私自身あまりうまくないのですが、やはり TA さんに助けられたときもあります。安井さんのほうで具体的に、こんな場でこういう対応をしたら場が



うまくいったというのがもしあったら、何かお願いできればと思いますが、いかがでしょうか。

**安井**：議論がどうしても硬直しがちなときは常にあります。演習でもそうですし、あるいは今回 TA を担当した講義でも院生による個人発表や、学生間のグループディスカッションがありました。全体が沈黙してしまう瞬間はどうしても起こってきます。私は、そういうときには多少無茶と思われるような話題の振り方もしていいと考えています。いまこのような意見が出ましたが A さんはどう思われますか、といったように、誰かを当ててもいい。停滞した流れをほぐすマッサージのような役割を演じることも TA の仕事の一環だといえるのではないのでしょうか。

**梶原**：ありがとうございます。少し強引に回すというのでも確かに大事かもしれないですね。ありがとうございます。

あと、さっきの北山さんの報告では、実習全体のコーディネートということだったんですけども、考古なんか比較的これに近い仕事をしてもらうこともあって、考古学もこういう実習旅行のようなものはあるんですけども、TA には別の作業をしてもらっていますので、実習旅行に関しては今日挙げていただいた半分ぐらいが私の仕事、半分ぐらいは学生のボランティアという状況ですけども (笑)。

それはともかくといたしまして、先ほど後半部分の話にもありましたように、先生方との間でどのようにコミュニケーションをとりながら実習旅行を組み立てていくのかお伺いしたいところです。例えばどこに行くとかどの地域に行つてどういう場所を見て回るとかは、先生方と TA さんの間でどのような話し合いをされているのでしょうか。教えていただけますか。

**北山**：実習旅行は費用などの問題もあって、日本国内の、名古屋から近いところですか、あまり離れたところには行かないということになります。受講している学生の興味関心は日本の美術をやりたいという人たちもいれば、西洋の美術をやりたいという人もいますが、どうしても行き先は日本美術の美術館というのが中心になってしまうということもありまして、先生方とのコミュニケーションについては、日本美術がご専門である伊藤先生と主に相談をすることが多いです。おおまかな行き先自体は、TA の行きたいところとか先生方の行きたいところから話を始めていて、院生の先輩方に、「こういう面白いところ、いいところがある」というのを教えてもらって、会話をしていく中でだんだん道筋をつけていって行き先を決

めています。その年の目玉の展覧会といったものもチェックをして決めていくという形ですね。

こんな感じでよろしいのでしょうか。

**梶原**：ありがとうございます。それでは、最初から先生が行き先を決めて TA に降ろすというのではなくて、行き先から TA さんが学生さんの意見を吸い上げ、先生と話し合いながら決めていく流れ、という理解でよろしいですか。

私のほうも非常に参考になるご意見でした。ありがとうございます。そういうご意見もありましたけれど、皆さんのほうから何かありますか。特に聞いてみたいということがありましたら、今までのご意見等も鑑みまして何かございますか。あまり無茶ぶりはしたくないので (笑)。(挙手あり) はい、ありがとうございます。お願いします。

**Q**：先ほどの飯田先生の授業のところで文献検索法を、ご自分によく分かっている、学生さんが初めてで分からないこともあって、何かまとめたとおっしゃったのですけれども、図書館があるので、司書と連携して、実際に行つてコピーするということはお考えではないですか。

**安井**：ご意見ありがとうございます。確かにせっかく図書館があるわけですから、調査法についてまとめた文献を司書の方に紹介して頂いたり、時間が許せば学生を伴つて図書館へ行き、調べ方に関するガイダンスをする機会を設けたりしたらよいのですけれども、なかなかそれらを実践するのも難しいところです。ただ、おっしゃる通り、TA と司書が連携して文献を用意することは可能です。

もう一点、私が他の学生から文献の調べ方を教えてほしいと言われたときには、飯田先生のご同僚にあたる日比嘉高先生のブログを紹介しています。このブログの存在をもっと積極的に告知してゆくことはひとつの方法だと考えています。

**Q**：ありがとうございます。

**梶原**：ありがとうございます。そういうレファレンスのことは確かに大事なと思います。

ほかに何かご意見・ご質問等ありましたら、ぜひよろしくお願ひいたします。まだ少し時間ございますので、いかがでございましょうか。よろしいですか。

それでは今回、2本のご報告をいただいたわけですし、また昨年・一昨年の資料も皆さんのお手元にあるかと思ひます。そういった資料をぜひ積極的にご活用いただきまして、先ほど TA と先生と一緒に授業を創り上げていくという話を申し上げましたが、皆さん

のほうで、与えられた仕事の中でどういうふうに自分のスキルアップをはかっていくかということ、いろんな研究室のグッドプラクティスを参照しながら、積極的に考えていただけたらと思います。

最後に、私よりも前から TA について研修会・説明会等々を主催していただいて、TA についていろいろお考えいただいております、前室長の中村先生から少しコメントを頂戴したいと思います。よろしく願いいたします。

**中村：**ドイツ文学の中村です。去年まで2年間、教育研究推進室の室長をやっていました。

こういうことをしようというきっかけになったのは、人事の書類で職歴に TA って書いてあっても、それを見たほかの人が、どうせコピー（程度の仕事）でしょって言っちゃうからです。

この業務は職歴・業績に書けることだから、名古屋大学の文学研究科で TA をしたということは、ちゃんと訓練を受けたということだと見てもらいたい。そして学生さんが少しでもよい条件を整えていってほしいと思ったのがきっかけです。

もう一つは、推進室の先生たちともいろいろ話しながら、今の時期、学振（学術振興会）に応募される方は多いと思うのですが、そういうときに論文が少な

い、人文の場合どうしても少ない、1本もないということもあり得るかもしれないのですが、そのとき書くものがゼロよりはいいだろうということで、こうやって報告書をつくるということも試みました。

今日のお話の中で、去年参加してお話を聞いて1年間工夫してくださったという話を聞いて、感慨深いものを感じております。教員のほうにも知ってもらいたいこともあるかもしれないんですけども、それ以上に院生さんたちの将来のための有利な、実も伴った形で利用してほしいと思います。

ドクターになると非常勤のお話もあるかもしれないですけども、そのときにも業績欄に何もないよりはあるほうがいい。一つでも書けるほうがいいと思います。

ぜひ、そういうふうに活用していただければと思います。ありがとうございました。

**梶原：**中村先生、ありがとうございました。それでは最後、質問等ございませんか。よろしかったでしょうか。それではちょうど時間となりましたので、本年度の TA 研修会はこれで終了とさせていただきます。お忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございました。（拍手あり）